

就職活動体験記

五十嵐 雪将 (法学部政治学科)

1 はじめに

私は公務員を目指して就職活動を行い、最終的に某県の司書職として就職することが決まった者です。昨年は本誌に海外実習の報告を寄稿しました¹⁾。海外実習と私自身についてより知りたいという方はそちらもお読みいただければ幸いです。今回は就職活動における様々な体験やその時々を考えを、この寄稿を通して後輩に伝えたいと考えています。

就職活動における基本的な部分について、筆記試験は公務員試験対策のための予備校が中心に、面接試験は大学のキャリアセンターや法学部の就職支援プログラムが中心にサポートしてくれました。ただ、公務員試験というものは、一定の形式が毎年ほぼ同じように使われているにもかかわらず、予備校や大学のキャリアセンターのサポートはまだ研究不足な点もあるように感じました。そこで、私が伝えられることがあればと思って筆を執った次第です。

2 公務員を目指した経緯

私は司書課程の登録生としては、やや珍しい法学部政治学科の男子学生です。そんな私は司書職を目指すというより、一般行政の公務員を目指して就職活動を行いました。

公務員に関しては就職における平等性が確保されているという点に惹かれて、就職活動をしようと考えました。私の人生の中では明らかに平等ではないという経験や、理由がはっきりしない出来事が何度もありました。これが公務員を最初に意識したきっかけです。

そして、大学進学に当たっては内部進学制度で社会学部社会学科と法学部政治学科のいずれかを希望し、法学部政治学科へ進学することになりました。いずれの学部学科も世の中における公正な活動の元となるルールの形成過程や実際の運用に触れることが出来ると考えて進学を考えました。また、公務員試験で出題される科目に通じる学びが出来るとも考えました。

法学部政治学科では実際に行政学や日本政治論などの科目を通じて、公務員が働く組織について勉強を深めました。その中で、縦割り組織の意味や歴史的にどういった事象があったかなどを学んで、公務員が働く組織の魅力をより感じました。また、憲法や民法などの科目を受けたことで、公務員試験で出題される科目も学びました。このように学部での学びが、より自身を公務員へと近づけるようになりました。

一方で、司書課程にも登録した私は、司書を目指す進路もあるのだろうかと考えることもありました。ただ街の司書を目指すということはあまり考えていませんでした。そもそも司書課程に登録したのは、司書として働きたいという思い以上に、人間として高校時代に会った司書の方と同じくらい立派な人間になりたいという憧れからでした。つまり、司書が持つ情報検索能力や情報を整理する力、そして正しい情報と利用者を結びつけるところに惹かれていたので、私はそれを司書として働くということに元から強い思いを持っていたわけではないです。そこで、公務員試験を受ける中で一般行政職と同じような試験で受けられるところで、出来る限り多くの利用者のために資する図書館を、併願するという結論に至りました。そして、各種公務員試験と共に、一部の図書館の試験も受けることになりました。

以上のような形で、公務員を目指すという意思形成と、実際にどのように受けていくかと

いう作戦を考えました。次の項でより実際にどのように受験したかを深めます。

3 実際に受けたものの概要

私は以下のような試験を受けました。第1次試験を受けた順番に公開できる範囲での受験官庁名と職種を記載します。また、民間企業についても可能な範囲で記載します。

I 公務員試験若しくは公務員試験に準ずるもの

- ① 東京都I類B（一般行政）
- ② 裁判所事務官（一般職）
- ③ 国立国会図書館（一般職）
- ④ 国税専門官
- ⑤ 国家（一般職）
 - i 東京航空局
 - ii 会計検査院
 - iii 東京法務局
 - iv 公正取引委員会
 - v 陸上自衛隊
- ⑥ 某県（一般行政）
- ⑦ 国立大学法人等グループ（事務）
- ⑧ 某市町村（一般行政）
- ⑨ 某県（司書）

II 民間企業

- ① システムエンジニア
- ② 公共工事を主な事業とする会社の事務
- ③ 製造業などを手掛ける会社の事務
- ④ 金属などを手掛ける会社の事務

これらのものを受けるにあたり、どのような準備をしてきたかということも簡単にご説明します。

まず、I 公務員試験若しくは公務員試験に準ずるもの（以下、Iとする）については共通して、数的処理や文章理解などといった教養をはかる科目が出題されるので、それらは予備校を通して3年生の4月から学びました。特に数的処理と文章理解については、中学受験の経験から解けるものも多く、あまり苦戦をしませんでした。また、Iの多くの試験では、民法、憲法、行政法、マクロ経済学、ミクロ経済学などといった専門科目が課されます。こちらも同様に予備校を通して教養をはかる科目と同時期から勉強を始めました。法律に関わる科目や政治学、行政学などの科目は学部で扱うので、こちらも量の割には苦痛を感じませんでした。ただ経済学など一部の科目は最後まで苦手なままでした。

そして、Iの試験の中には一部特殊な対策が必要となった試験もありました。例えば、①の東京都I類B（一般行政）や③の国立国会図書館（一般職）では、先述した専門科目の回答方法が多肢選択式ではなく、論文形式の試験なので、それに合わせた対策が必要です。これは試験が始まる直前の2月に数回行われた予備校の模試を通して勉強をしました。中には②の裁判所事務官（一般職）など、多肢選択式の問題と論文形式の問題を両方課せられるもありました。また、司書の試験では専門科目が司書に対応した児童サービス論などの科目に変わります。これについては、昨年の本誌に掲載されていた「就職活動体験記」を参考に勉

強しました。私はそこに掲載されていた3巻分の問題集『司書もん』を、⑨の某県(司書)を受ける1週間前から短期間でやり込みました。この部分の対策は予備校では全く案内がないので、自分で対策する必要がありました。ただ、司書課程の授業をしっかりと受けていれば、多くのことは先生の方々が授業のどこかで話したことが試験に出題されているので、ゼロから始めるというわけではありませんでした。

最後に、IとII 民間企業(以下、IIとする)に共通する論文試験と面接試験について次のような準備をしました。まず、論文試験についてはI向けに予備校からテキストを3年生の7月頃に頂いて基礎を勉強した上で、2月頃の模試で練習をするということをしました。また、面接試験についてはIの1次試験の結果が分かり始める5月頃から始めました。正直、この二つの試験を対策する時間は3年生の後期末試験が終わるまで一切ありませんでした。それまでというのは、私は法律相談を請け負うサークルでの広報長という役職と鉄道研究をするサークルでの会計という役職に追われながら、法学部の授業と司書課程の授業を国外実習込みで行っていたので、とてもそこまでの余裕がありませんでした。また、第1次試験を通過しなければ、そもそも対策も活かされないという不安もありました。これをお読みの方でも、アルバイトや家庭の都合などで余裕がないという人は大勢いるでしょう。しかし、むしろ就職活動全般で重要なのはこの論文試験と面接試験でした。以下では、この点についてどう失敗したかを述べます。

4 大きな失敗

私は就職活動において、一般行政の公務員を目指していたというのはここまででお判りいただけたと思います。そして、公務員試験における筆記試験の対策の様子も何となくお判りいただけたと思います。しかし、大きな失敗は論文試験と面接試験を軽視していたところにあります。特に面接試験については大きな失敗だったと振り返って思っています。

私は論文試験について、予備校の模試ではどの課題でも合格最低点を切ることはなく、安心していました。しかし、実際の公務員試験では情報開示請求をしたところ、芳しくない成績の試験がいくつかありました。そういった成績の試験では、最終合格を頂けていません。論文試験は多肢選択式の問題とは異なり、絶対に同じ回答をしなければ減点ということはありません。ただ、公務員試験として点数化する以上、必ず減点をする要素か加点をする要素があります。私は点数化した時に芳しくない点数も取ってしまう実力であったと後から客観的に分かりました。

また、面接試験については相当苦労しました。その結果、私は自己否定をするようになってしまいました。例えば、Iの⑤ 国家(一般職)では、国家公務員としての適性を見るための試験と各官庁での採用試験は別個になっており、国家公務員としての適性があったとしても、各官庁に採用されないということがあります。私は国家公務員としての適性が見られる、国家(一般職)の第2次試験としての面接試験は合格しました。しかし、各官庁での採用試験での面接試験は一つも受かりませんでした。中には採用候補の名簿リストから直接お電話を頂いて、受験した官庁もありますが、それも受かりませんでした。その結果、私は9月の時点で、面接試験を通過して内定につながるような結果を持っていませんでした。世間では既に内定を持っている学生がたくさんいるというニュースが上がり、身の回りも公務員試験受験者を含めて内定に準ずる結果を持った同級生が増えていく中、私は非常に焦りを感じました。

その後、私は公務員試験ではなく民間企業の面接試験を受けてみることにして、9月以降

は前述のようにいくつかの民間企業を受けました。この中ではⅡの①システムエンジニアとご縁があり、内定を頂くことが出来ました。これが初めての内定でした。内心、この内定をもって就職活動を終えようかなとも考えていました。ただ、出来るだけ多くの選択肢から選ばないと、自分の就職先を見誤るかもしれないと考え、9月後半から試験が始まるⅠの⑧某市町村（一般行政）と⑨某県（司書）の試験も受けました。結果いずれも12月に最終合格を頂けました。

司書を含めた公務員試験は、知識や能力をはかる試験と人物性を見る試験の組み合わせで行われることが多いです。また、一部の組織では知識や能力をはかる試験の重さを今までより軽くして、人物性に重きを置いた試験を実施しようという取り組みも見られます。例えば、知識や能力をはかる試験は民間企業と同様のSPIなどと呼ばれる試験を導入するということもあります。公務員試験を目指して勉強している人々の多くは、知識や能力をそのような試験で問われても何ら問題がないレベルには仕上がっていると思います。その一方で、グループディスカッションやプレゼンテーションを課すことで人物性をより深く見ようという試験も広まりつつあります。このような傾向の中で、私は知識や能力をはかる試験ばかりを見ていたと、あとから自己分析をしています。しかし、その思考回路がどのように形成されていたかと振り返ると、予備校でずっと練習してきた内容のほとんどは知識や能力についてであったところに起因します。さらに、多くは知識や能力をはかる試験が第1次試験として課されている以上、それが出来ない者は第2次試験以降で行われることの多い人物性を見る試験と最終合格に至ることが出来ないという仕組みから、そういった思考に陥るのもごく自然なのかなと思います。でもだからこそ、知識や能力を問われる試験に向けた対策ばかりをした人は最終合格できないと私は考えています。どうしても就職活動の間は不安な気持ちが大きいので目の前のことに必死になってしまいます。私はこの気持ちによって隠されてしまった大事なことの見落としで失敗してしまったのです。勉強の要領が良くない自分は、人物性を見る試験で逆転できると勝手に高を括っていたのですが、代償はとても大きかったです。

5 結果的に司書職として働くことになった決め手

私は9月にⅡの①システムエンジニアとして内定を頂き、12月にはⅠの⑧某市町村（一般行政）と⑨某県（司書）の最終合格を頂きました。システムエンジニアとして働くことに一時心が向いた私はどこに何を感じて、某県の司書として働くことにしたのでしょうか。

まず、システムエンジニアとして働くことに魅力を感じたのは、情報に関われる仕事であることと会社の社長とお話しした時に感じたシンパシーでした。司書課程の学びの中で私は、情報の流通やそれを支える仕組みについて勉強しました。その中で、情報の流通が止まらないように支えることが出来るシステムエンジニアの仕事は魅力があるというように感じたのが1点でした。また、会社の社長と、クレジットカードとシステムエンジニアの仕事に関する話をしたときに感じたシンパシーが私にとっての魅力でした。

ただ、その一方でシステムエンジニアとしては一緒に働く人々に不安を感じる点もありました。仕事をする時には様々なことを意識していますが、最も大事なことは真面目な場面で真面目になるという、スイッチのオンオフが出来ることだと考えています。また、そのスイッチのオンオフをするためには、刻々と変わる状況に気を配れているかということも重要です。その点について、大きく不安を感じる出来事とその会社ではあったので、12月まで就職活動を続けました。その結果、12月に二つの最終合格を頂きました。

二つの最終合格がほぼ同じ時期に出た私は、やはりそこでも一緒に働く人々という点を考

えました。Iの⑧某市町村（一般行政）は、受けた面接が公務員試験の中でもトップレベルの圧迫気味な面接で、正面に3人と脇に2人の計5人の面接官を相手に、1人で話し続けるものでした。その面接中は、終始横柄な態度で質問されたり、否定的な質問が続けられたりと非常に印象の悪い物でした。一方で、Iの⑨某県（司書）は面接の中で「司書がなくなる仕事かもしれないですがどうお考えですか」といった意味のある質問をされたり、採用に向けた面談でも圧迫感のない雰囲気で行われたりと、好印象でした。また、最終合格をした人に会う機会でも高い意識を持った同期の方々や先輩職員と懇談が出来ました。こういった形でそれぞれの職場で関わる人々を出来るだけ見て、就職先を選びました。公務員を含め、これからの時代はどのようになっていくかわからない以上、たとえ所属している組織がなくなったとしても支えあっていけるような人々であることや、現状を正しく理解した上で高い意識をもっている人々であることは私にとって、就職先を考える重要な指標でした。これが私の就職の決め手です。

結果として、一度内定を頂いた企業様にお断りを入れることになったのは非常に心苦しいところがありました。ただ、内定辞退を申し入れた後に面談に呼ばれたときに、「しょしだっけ。何だっけ。」みたいに司書のことを言われたときに、私の居場所をここにしたら自分が自分らしくあることはできないだろうと思いました。きっとどの職業についても、司書のことを意識しないということは私のこれまで学んできたことから考えればあり得ないです。つまり司書というものは私のアイデンティティとして、既に無視できないところにあります。それを軽視する人々と仕事をしたら、耐えられない苦痛を味わうと私は感じました。お仕事をお給料から考えれば、内定及び最終合格を頂いた三つの中で、司書は最も低いです。それでも、その面談は就職先がそこではないと確信した瞬間でした。

6 就職活動における対策ポイント

ここまでの経験から私が考えるポイントをいくつか書き残します。まず、やれることは全てやり切ることが本当に大事です。そして、就職活動をしている中で自己中心的にならないこと、人より時間がかかっても気にしないことも大事です。ここでは公務員や司書に限らない言葉に一般化していますが、以下では少し具体化します。

やれることは全てやり切るということについては、当たり前だと思われるかもしれませんが、大変重要なことです。私はこれが出来ていなかったのが重要性を感じました。公務員試験の多くについては、経済学をあまりやり切れていないまま受けることになったことが後々気になりました。実は経済学を選択しなくても乗り切れる試験は多く、Iの②裁判所（一般職）は経済学の代わりに刑法を選択して、第1次試験を通過しました。ただ、一部の試験ではどうしても経済学の必要性和自分の実力不足を感じました。こういうことを感じないようにやり切るというのは大変重要です。その経験から司書の専門科目に関しては、かなり直前とはいえ、満足がいくまでやり切りました。購入に迷いはあったものの、やり切るために購入してあった『図書館情報学用語辞典』も、試験前にパラパラとめくっていたところから偶然出題があったので、やり切ることの大事さを実感しました。段々歳を重ねると、ものごとをやり切ることが難しくなるようになってきます。それは体力やアルバイトを含めた仕事の有無など、様々な原因が重なった結果だと思います。でも、その中でも最大の努力を投下することが大事です。私の周囲で特に公務員試験で結果を残した人は皆、私のそれまでの努力以上のことをしていたので、これは間違いないポイントだと思います。

自己中心的にならないことというのは、努力の仕方という意味で大変重要です。努力をす

るといっても、自己中心的になったものは就職活動の場で評価されません。あくまで自分が働きたいという希望と相手が雇い入れたいという希望とが合った時にしか、就職活動は上手くいきません。そもそも就職活動という言葉自体が求職者を主観とした言葉だと思います。就職活動は新しい人材を雇い入れる組織からすれば、採用活動などという表現に変わるものだと思います。だから、相手がどのように考えていて自分はどうすればいいかということを考えなければなりません。しっかりとした組織であれば、求職者のことを考えてどうすれば求職者の良いところを引き出せるかということを考えていると思います。なぜなら求職者の力を借りて、組織をより良くしようと考えているはずだからです。そうだとすれば、求職者も組織の側をよく知る努力が必要でしょう。特に公務員試験で実力を発揮した仲間は、この点が秀でていました。例えば労働行政に興味のある仲間は、ハローワークを訪れるだけでなく、サービスを利用したり職員の方に質問をしたりと積極的に中身を知る努力をしていました。公務員の組織は場合によって秘匿性が高く、中身に迫る機会が少ないこともありますが、それでも論文などからアプローチすることは可能です。また、司書に関しては司書が書く論文から実際のカウンターサービス利用まで様々な機会に触れやすいので、こういった努力がしやすいです。実習も司書においては大事な機会でしょう。せっかくの努力が正しい方向に向かうためには、このように自己中心的にならないことが大変重要です。

人より時間がかかっても気にしないということは、決して期間が後ろに延びていくことだけを指すわけではありません。むしろ、自己分析の深度が深く計画性がある故に、時間がかかることもあります。その場合は早い段階から就職活動を進めていても、区切りをつけた時期は周囲と大差がなかったということになるでしょう。この場合を考えれば、人より就職活動の時間がかかっていることは大した問題ではないと思います。確かに、期間が後ろに延びていくと私もそうであったように、求人数に限りが出てくるという問題はあります。ただ、そこに慌てて相対的評価ばかり気にした就職活動はきっと後から後悔します。慌てて考えた結果、入った組織で「私が耐えられるものではない」と感じたら勿体ないです。だからこそ、満足がいくまで誰に何と言われようと戦い続ける必要があるでしょう。自分の身を自分で守るためには、そこで諦めない強さが必要です。かつて、自分は様々な場面で周りから強い圧力を受けて屈してきました。今思い出してもそれらの思い出は悔しい限りです。だからこそ、時間がかかっても絶対的に良い結果にこだわって戦いましょう。特に公務員試験は、近年の民間企業の採用動向と比較すると、最終合格の時期が遅いことも多々あります。また、司書に関しては公務員試験の中でも時期が遅くなっていることが多いです。その中でも、自分はその場に居場所があるはずと信じて戦ってください。これは一見苦境を長く耐え抜くことを強制しているようですが、長い目で見たときの満足を得るための助言として受け止めてください。もちろん無駄に引き延ばす必要はないので、早く満足のいく結果が出ればそれに越したことはありません。

7 おわりに

拙い文章だったと思いますが、いかがだったでしょうか。経験したこと、そこから考えたことを大学4年生の意見として、今回は色々書きました。まだ自分自身で整理がついていない部分は沢山あるので、読みにくかったと思います。でも、ここまで自分自身をかき乱して挑むものが就職活動なのだと思います。学生における就職活動は練習の効かない一発勝負です。当然、最初から上手くいく人もいるでしょう。でも、上手くいかない人は就職活動をする中で修正をしていかなければなりません。

私の場合、修正作業には周りの人の支えが重要でした。修正に付き合ってくれた周囲の優しい方々には本当に感謝しております。私のパーソナリティーを理解してくれている人や就職しようとしている場所に詳しい人から頂くサポートは、私の就職活動において大変重要でした。若干話は逸れますが、就職活動の前後の人生では私の存在自体を否定してくるような方も多かったです。だからこそ、就職活動中に素敵なサポートを頂けたことがどれだけ貴重なものかと私は感じます。

就職活動の本番を迎える方々には、ぜひ力強く戦ってほしいと思います。もちろん、筆記試験や面接の本番に誰かを伴っていくということはできません。でも、自分を支えてくれるような素敵な方々の存在があれば、自分の思っている以上に力強くなれます。私も後輩の皆さんの健闘を陰からお祈りさせていただきます。

¹⁾ 五十嵐雪将「国外図書館実習（台湾）を経験して」『St. Paul's librarian』No.33, 2019.3, p.87-91.